

【佳作】

「北方領土返還に込める想い」

根室市立光洋中学校

1年 近藤 妃香

「北方領土返還」という言葉は、私が幼い頃から何度も耳にしてきました。私には「北方領土が返ってきてほしい」という、強い気持ちがあります。

なぜなら、私の曾祖母が国後島出身だからです。家族は、曾祖母を含めて兄弟八人と両親の十人暮らしでした。

当時小学二年生だった曾祖母は、学校から帰ると、昆布の手伝いをしたり、すぐ近くの山にイチゴやフレップという果物を、兄弟や友達と採りに行って食べるのが、楽しい日常の一つだったそうです。そんな楽しい日々の中でも、学校では、いつ戦争になるかわからないという理由で、自分の身を守る訓練もしていました。

また、曾祖母の父が、家の近くに小さな防空壕を造ってくれました。この時に一番衝撃的だった曾祖母の父の言葉があります。それは、

「ロシア人が来て、いざという時は皆でこの中に入るんだぞ。ロシア人に殺されるくらいなら、皆ここで死のう」という言葉でした。

この時、曾祖母は、小さいながらも防空壕の中を見つめ、

「ここで死ぬかもしれない」と、覚悟したと聞きました。私は、そのことを聞いて、まだ幼いのにそんな大きな決断をしなければならなかったということに、胸が締めつけられる思いでした。

その後、日本が戦争に負け、ロシア人が国後島に何度もやってくるようになり、突然やってくるロシア人に殺されてしまう人もいました。そんなことが続いたある日、ロシア人は曾祖母の家にもやって来ました。曾祖母は「殺されるかもしれない」と覚悟しましたが、そのロシア人は、家の家具を持っていくかわりに、曾祖母の父にお金をくれました。家を荒らされると思っていた父は、驚き、ロシア人がくれたお金を、

「大事にするんだぞ」と、曾祖母に握り渡してくれました。その時もらったお金は今も大切に残っています。

私はこの話を聞いて、「ロシア人は悪い人ばかりではない。その中にはいい人だっている。日本人の命を大切に考えてくれるロシア人もいるんだな。」と思いました。

きっと曾祖母の父もそう思って、曾祖母にお金を託したのだと思います。

ですがやはり、頻繁に来るロシア人に恐れながらの生活は精神的にも苦しく、終戦から二か月が過ぎた頃、家族で根室へ逃げることにしました。

夜な夜な、小さな船に、曾祖母の家族のほかにもたくさんの人が乗り込み、海がしけて船が大きく揺れて、とても怖い思いをしたそうです。

当時は住み慣れた村を離れる淋しさなど、感じる余裕もない心境でした。

きっと私自身も同じ気持ちになると思います。とても悲しいです。同時に、もう二度と、このよう

なことが起きてはならないと、強く思いました。

現在曾祖母は八十二歳になりました。今でも当時のことを思うと、

「ずっと国後島に住んでいたかったな」と、楽しかった思い出がよみがえってくるようです。曾祖母に残された時間は、あまり長くありません。少しでも早く、北方領土返還が叶い、曾祖母と一緒に国後島へ行き、曾祖母が暮らした村を自分の目を見て、自分の足で大地を感じたいです。そのためにも、領土問題という日本とロシアとの間の大きな壁を乗り越えるため、思っていることを声に出し、伝え続けていきたいし、それが大事だと思っています。

それが、四世である私の役割なのです。